

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第134号

イザヤ 65:1

平成18年11月24日

~~~~~  
小さい者たちよ。今は終わりのときです。あなたがたが反キリストの来ることを聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現われています。それによって、今は終わりの時であることがわかります。彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし私たちの仲間であったのなら、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。しかし、そうなったのは、彼らがみな私たちの仲間ではなかったことが明らかにされるためなのです。あなたがたには、聖なる方からの注ぎの油があるので、だれでも知識を持っています。このように書いて来たのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、真理を知っているからであり、また、偽りはすべて真理から出てはいないからです。偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。御父と御子を否認する者、それが反キリストです。だれでも御子を否認する者は、御父を持たず、御子を告白する者は、御父を持っているのです。あなたがたは、初めから聞いたことを、自分たちのうちにとどまらせなさい。もし初めから聞いたことがとどまっているなら、あなたがたも御子および御父のうちにとどまっているのです。それがキリストご自身の私たちにお与えになった約束であって、永遠のいのちです。私は、あなたがたを惑わそうとする人たちについて以上のことを書いて来ました。．．．子どもたちよ、キリストのうちにとどまっていなさい。それは、キリストが現われるとき、私たちが信頼を持ち、その来臨のときに、御前で恥じ入るといふことのないためです。ヨハネの手紙第一 2：18－28

二人一組で戸別訪問をして伝道しているエホバの証人の方たちが「偽りの宗教の終わりは近い!」と題したチラシをポストに残していきました。その中で彼らは、偽りの宗教とは何かを問いかけ、宗教の名の下に行なわれている悪事、神を信じている者たちによって引き起こされる武力衝突、テロ行為、腐敗の実態を非難、宗教が多くの問題の根源になっているようだがなぜかと問題を喚起し、その原因が“偽りの”宗教にあると結論付けています。その主張の中で、偽りの宗教の特徴を、1. 戦争や政治に関与する 2. 偽りの教理を広める 3. 性の不道徳を容認する としています。1. に関しては、米国の著名な宗教指導者が流血惨事をとどめるにはテロリストたちを殺す必要があると言い、「主の名において」彼らを一掃しようと呼びかけたことの間違いを、それに反するキリストの教えを引用することによって正しく指摘しています。3. に関しては、西欧諸国で教会が同性愛者を聖職者として任命し、また、同性愛者の結婚を合法化する動きに関与している等、聖書の教えから大きく逸脱した現状をやはり、「だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません」（コリント第一6：9－10）を引用することによって、神の創造の秩序より人道主義を優先した、すなわち、人間の感情を重視し、この世に迎合した教会の墮落を正しく警告しています。

しかし、問題は2. の教理に関する彼らの主張です。「たいいていの宗教は、魂や霊が人間の一部分を成す目に見えないものであり、肉体の死後も生き残ると教えます。この教えにより、そうした宗教の多くは、亡くなった人の魂のために祈って料金を請求し、信者を利用して、．．．イエスは亡くなった人々が復活すると教えました。もし人間が不滅の魂を持っているならば、復活は必要ないこととなります」（王国ニュース第37号）と主張していますが、これは、キリストの教え、聖書の主張に矛盾する偽りです。高齢化社会、少子化時代を迎えた昨今、キリスト教会の中に“葬式産業”に乗り出す動きがあることから、偽りの宗教の教理を暴くこの主張が、葬式等による臨時収入に依存している教会運営や牧師のポケットマネーの実態に言及するものとして捉えることはできますが、『死後、霊、魂は存在しない』とする聖書解釈は真理の曲解です。エホバの証人は、エゼキエル18：4の聖句「罪を犯した者は、その者が死ぬ」を、自らの主張を裏付ける聖句として用いていますが、エゼキエル書18章は死後の靈魂の存在の有無を論じているのではなく、「罪を犯した者は自分の罪のゆえに死ぬのであって、他人の罪のゆえに死ぬのではない」という神の裁きの基本原則を論じているくんだり、自らの教理を正当化するために一聖句だけを取り上げる聖書の用い方は明らかな間違いです。聖句を正しく解釈するには、意味を文脈の中で捉える必要があります。どのような状況下、歴史的背景で、どのような対象に、だれが語ったものであるかを無視した引用、応用は聖書の主張を大きく歪めて伝えることとなります。ヘブル語（旧約）聖書から新約聖書へと一貫して流れるダイナミックな神の言葉、神の遠大なるご計画が語られている聖書は、ヘブル人を通して人間史に反映されてきた神の主権、ご臨在を証しする歴史書であると同時に、まだこれから実現することになる神の人類救済のご計画を啓示した預言書でもあります。したがって、聖書は、時代を越えて今も人類に語りかけ、働いておられる“神”の私たちへのメッセージとして高度な神の基準に基づいて解釈されなければならないのですが、残念ながら、教会や牧会者のメッセージを裏付けるために寸断して、部分的に都合な箇所だけを引用、応用する伝統のゆえに、正統的、主流と言われるキリスト教派においても正しい

聖書解釈がなされていないことが多々あるのです。

エホバの証人はまた、死後、人は無意識の状態にあることを裏付けるため、伝道の書からも聖句「生きている者は自分が死ぬことを知っているが、死んだ者は何も知らない」(9:5)を引用していますが、聖書の中に占める『伝道の書』や『箴言』の特異な位置づけ—この世の視点からのみ人生を見る空しさ、神の視点から見るとき、意義深く、希望に満ちたものに変えられることを悟った者の悟りへの遍歴の書であり、真理が宣言された書ではない—を踏まえた上で聖句を引用したり、応用したりしないと、誤用する危険が生ずるのです。特に“死”に関して、『伝道の書』の著者ソロモンは、明らかに矛盾した二つの立場を表明しているのです。人は死んで最後は無に帰すこと、「私は心の中で人の子らについて言った。『神は彼らを試み、彼らが獣にすぎないことを、彼らが気づくようにされたのだ。人の子の結末と獣の結末とは同じ結末だ。．．．人は何も獣にまさっていない。すべてはむなしだからだ。みな同じ所に行く。すべてのものはちりから出て、すべてのものはちりに帰る』(3:18-20)と、空しさを訴える一方で、復活の希望も語っているのです。「善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれる」神が、神を恐れる者には道を備えてくださること、また「ちりはもとあった地に帰り、霊はこれを下さった神に帰る」(12:7)と、死後存在するための行き先があることをも語っているのです。よく似た視点から、詩篇49篇の著者は、神を恐れる者の死を越えた希望—神の御許での永遠のいのち—を語っています。「人はとこしえまでも生きながらえるであろうか。墓を見ないであろうか」と死後の状態に疑問を抱いた詩篇の著者は、「悟りがなければ、人は．．．滅びうせる獣に等しい」「神は私のたましいをよみの手から買い戻される。神が私を受け入れてくださるからだ」という結論に至ったのです。この世の不公平に苦しみながらも神の道を歩む者の魂は、聖書が明確に主張しているように不滅で、死後も神の御許で永遠に生きるのです。同様に、神を恐れない邪悪な者の魂も死後不滅で、全人類の復活のとき、朽ちない体が与えられ、最後の審判（「大きな白い御座」の前での全人類の裁き）の座に立たされた後、火と硫黄の燃える「火の池」（地獄）に投げ入れられ、永遠に苦しみ続けるのです。

エホバの証人と同じように、キリスト教の中にも死後の「体」の甦りを否定する教派、者たちがおり、その見解を支持する者たちは、主イエス・キリストの再臨を真剣に待ち望まないばかりか、そもそもその必要はないと言い切るのですが、このように見解の相違が生じたのは、ヘブル思想に基づいて語られたキリストの教え、福音がギリシャ語で書かれたときにさかのぼるようです。神が人の体を霊、魂、肉のバランスが取れて初めて、「よし」とされたときみなすヘブル思想に対して、肉を嫌い、人間は肉から解放されて靈魂の状態になることを理想とするギリシャ思想、ギリシャ哲学が新約聖書解釈に影響を与えたことによって、いつの間にか、体が伴って初めて完全とみなすヘブル思想は忘れ去られ、肉から解放されて靈魂の状態になり、地ではなく、天国に永遠に住むのが死後の理想的な状態とするキリスト教という“宗教”思想が定着してしまったのでした。聖書が語っている正しい福音は、キリストを信じる者たちがこの世の生の後、朽ちる肉の体の代わりにキリストと同じ甦りの“からだ”に復活するという約束であって、不滅の“たましい”に復活するのではないのです。死後、肉体は朽ちても、キリストを信じて死んだ者は、靈魂が意識あるまま神の御許に戻され、しばらくの間、信じる死者の待合所である“パラダイス”に置かれることとなります。彼らは、キリストの「来臨（再臨）のとき」、まだ地上に生きているキリストの証し人（キリスト者）たちとともに、永遠に生きる“甦りのからだ”を与えられ、神の国（天の御国）を相続することになるのです。パウロの言葉を借りるなら、現在の罪に汚れた「血肉のからだ」ではなく、「天から出た者」、すなわち、キリストに似た、朽ちない「天上のかたち」を持つ「御霊に属するからだ」にラッパの音とともに一瞬のうちに換えられるという、“からだ”の甦りが紛れもない聖書の約束なのです。

魂は思考、意志、感情をつかさどる人間の重要な構成要素で、独自の個性、人格を持ったこの世にたった一人の私やあなたは死後もそのまま存続し、朽ちない体が贖われるまで、神の御許で今か今かと時を待つこととなります。時が満ちて、いよいよキリストが地上に再臨されるとき、父なる神ヤーウェを信じた旧約時代の信徒（神の証人）と、キリストを信じた新約時代の信者（キリストの証し人）とは、「幸いな者、聖なる者」の甦りである「第一の復活」に与り、靈魂に新しい体が伴われて完全な人として、神の家族に永遠に連なることになるのです。このように聖書が約束する体の甦りは、仏教が語る、人の他人への、あるいは、動物への生まれ変わりを説く『靈魂再来説』とは全く相容れず、そのような教えを完全に排除しています。時の次元の外におられる神は創造の当初から、一人一人を全時代、全世界で一人しか存在しない大切な神の家族の一員として造られたのであり、もし裁きの結果、「火の池」に投げ入れられることになったとしたら、それは個々人の神への反逆、罪の結果で、責任は神でも環境でも他人でもなく、自分にあるのです。

冒頭に引用した、ヨハネの手紙第一は、終末の時代にキリストの教えに取って代わる教えや、キリストによる救いに置き換える偽りの福音、キリストの占める地位に置き換わる反キリストなる者たちが到来することを警告していますが、この二千年間、実に様々な反キリストが現れては消え、また現れるという形で、初代教会以降、今日に至るまで、異端的教え、伝統が今も根強く残っているのがキリスト教界の現状です。キリストの教多くたたとえに反映されているのは、このような人間史における真の信仰の在り方の難しさで、このような混乱の時代が来ることはすでに洞察されていたのでした。反キリスト的教えが蔓延するこの世の時勢に流されないで、正しい信仰に生きる唯一の安全弁をヨハネは、「初めから聞いたこと」に留まることであると忠告しています。この「初め」とは、イエスの弟子たちの時代、西暦一世紀の初代教会にさかのぼるヘブル思想に基づいた教えのことであって、西暦四世紀以降に設立された伝統的なキリスト教会の教えでないことは明らかです。聖書に記されているキリストの教えに留まる以外に永遠のいのちに与る道はないのです。



暗闇から光を切望する時節がまた巡ってきました。

世の光、イエス・キリストは、人類の救いのため手を差し伸べておられます。

主、イエスを受け入れ、信仰、希望、愛が、

皆様の心に灯される時節となりますようお祈りいたします。